

幼児のジャンケンの理解とあそび



藤 田 政 雄

まえがき

ジャンケンは本来石拳イシケンという拳ケンの一種で片手を握り拳コブ、鋏刀ハサミ形、指の全開即ち俗に、グー、チョキ、パー（または石イシ、鋏ハサミ、風呂敷フユキ、または紙カミ）の三種の形に変化させて相手と勝負をきそうあそびで、日本全国の家庭、一般社会において男女老若をとわず知られ、親しまれている。

酒井欣著「日本遊戯史」（第十六章拳）によれば十種以上をかぞえ、その發祥は支那の周時代といわれ、晋時代には竹林の七賢人の酒宴における余興として用いられたといわれる。しかもこのあそびにおいては特に礼法がきびしく士君子の風格があるものと

して尊敬されたとも言われる。

わが国にはすでに奈良朝頃から遣唐生などにより紹介され、それが随筆として用いられるに至ったのは徳川時代の延宝、元禄の頃と言われる。その後幕末にいたって益々さかんとり明治年間に極盛期に達し今日に及んでいる。わが国においても支那におけると同じく本来、おとなの酒宴の余興とされたのであるが、ここでとりあげたジャンケン（石拳）は子どものあそびとして特に流行したものである。

明治、大正時代に少年時代をすごした人であればその他の蟲拳ムシケンとか藤八拳フジヤチケン（庄屋、鉄砲、狐）などのあそびを想像できるであろう。筆者もその一人である。拳ケンが本来おとなのあそびに端を發しているだけに、このジャンケンも今日なおおとなの世界にもいろ

いるの目的で用いられていることは周知の通りである。おとなの場合はいわゆる余興として用いられるばかりでなく、金銭的取引やかかけこなどにも用いられるが、子どもにおいてはあそびそのものとして親しまれていることが多い。

さて私がジャンケンを幼児の世界においてとりあげた動機を簡単に述べると、十数年来、精神薄弱児その他の心身障害児の相談指導の方法として各種の指テストを試みているうちに、最も日常的に親しまれているジャンケンが精神発達上きわめて有意義であることを認めたからである。

その後、筆者は一般の幼稚園や保育所の二歳児以上の幼児に試みて、ジャンケンの幼児期における各年齢に応じた発達程度をたしかめつつ、ますます精神発達との関係が深いことを知りえたのである。入園時の面接テストにおいてよく試みるが三歳児にしてほとんどジャンケンの経験をもっているほど家庭生活で一般化していると思われる。

幼児の精神発達とジャンケン

すでに述べた通りにジャンケンは手指の三つの形の変化をもって相手と勝負をきそうあそびであるが、その三つの形とは五本の

指を全部として握りこぶしをつくるグーまたは石（またはおにぎり）、人差指と中指を伸ばして他は閉じるチョキ（または鉋、地方により親指と人差指を伸ばす形もある）、五本の指を全部、伸ばし開くパー（または紙あるいは風呂敷）である。持ち指の開閉の変化を日常の経験にうまく取り入れたものとして親しみやすい。

さてここに特に幼児のあそびとしてジャンケンをとりあげる意味を今少し明らかにして更に年齢との関係を述べたいと思う。すでに述べたようにジャンケンは手指の開閉即ち運動を中心にしたあそびであるが、今までの研究によれば、人間の諸種の運動機能のうちで最も早く完成するのは手指の運動でそれが三歳前後と言われ、従って大脳における運動中枢のうち手指の運動中枢の三歳前後の完成が精神発達を象徴すると考えられる。

かかる観点から中修三博士は三歳児からの指テスト（十種）を考案され精神発達の測定に用いられている。ジャンケンの形もこの指テストの中において見出すことができるのである。

家庭の親たちが三歳前後の子どもにジャンケンあそびをさせるのも、こうした人間発達の自然に従っていると言うこともできる。以上のことからジャンケンが指テストと深い関係があること、従ってまた幼児期のあそびとして極めて有意義であると言う

ことができる。しかしジャンケン是指テストと異なつて他の面をもっていることを忘れてならない。即ち指テストが相手の手指の形をまねて同じ形をつくるという受身的模倣的なやり方であるのに対して、ジャンケンは、両方が自分自身の考えて自由自在に形を変化させ、同時に出して、両方の形の差異により直観的瞬間的に勝負を確認するという積極的能動的で全精神を集中する高度の精神活動である。

もちろんそれは完成されたジャンケンのおそびであるが、それだけに精神発達を知る上にきわめて重要な特徴となるわけである。従つて完成されたジャンケンおそびができるまでには長い発達期間を要するわけで三歳児に直ちにこれを求めることは一般には無理である。

今、三歳児から六歳児に至るジャンケンの発達過程を簡単にとらえて参考に資したい。ジャンケンの基本として相手と同時に手を出して静止出来るかどうかを試みると三歳児(正常児以下同じ)において六〇%から七〇%、四歳児において九〇%、五歳児において一〇〇%が可能である。従つてジャンケンおそびは五歳以上において正常児の場合、ほとんど可能であらう。

勝敗の理解について年齢別をみると三歳児においてはほとんど勝敗の理解が困難であり四歳児においては約五〇%、五歳児にお

いて約八〇%、六歳児において一〇〇%が理解できると言える。特に四歳から五歳において急激に理解度が高まることがわかる。

幼稚園における年少組(三歳児)でジャンケンおそびが無理であることは言うまでもない。しかし年中組(四歳児)になるとある程度可能であり、年長組(五歳児)においては大体可能であると思われる。年長組にも、三つの形の部分的理解しか出来ないものも若干あるがおそびに参加することは出来るであらう。

もし年長組でなお勝敗が全然わからないものがあれば精神発達遅滞について疑いが残るので、更に詳細なテスト、調査の必要がある。精神薄弱児の場合、正常児と同じ精神年齢(M・A)においても、六歳児(M・A)には勝敗の理解は困難である。

精神薄弱児にとつて、形の比較弁別は極めて困難であることがわかる。かくて、ジャンケンおそびを通じて親や教師はきわめて自然な状態において精神発達の状態を知ることができ、知的発達の正常性と異常性を把握することも可能である。指テストや知能テストなどの評価の価値が高いことは言うまでもないが、それは、十分条件づけられ、熟練した検査者によつてこそ、正しい結果と判定が可能である。

また幼児期において特別の必要ないかぎり、各個人の能力のテストをやることよりも、正常か異常かを早期に発見することこそ

重要ではないかとおもう。また忙しい幼稚園や保育所の指導者が未熟な技術と不十分な条件の下で知能テストを行なってその結果でその子の知能を云々し、また、親に知らせて一喜一憂させることは、かえって害あって利なしの感を深くする。従ってこの期にあっては、出来るだけ自然な条件のもとで、子どもが全精神を發揮するあそびの形式でその発達をとらえることが望ましい。

かかる観点からジャンケンあそびは、親子、教師と子ども同士の人間関係で、何時でも、どこでも行なうことが出来て、その状態を把握出来るのが特徴である。もちろん、子どものあそびは、あそびとしてそれ自身、意味があるが、指導者としての親や教師はその精神発達上の意義を理解して、わが子、教え子の発達を見守り、その指導に資したいものである。

次にかかるジャンケンをあそびそのものとして幼児期にいかにとり入れることが出来るだろうかを参考に述べてみたい。

幼児とジャンケンあそび

ジャンケンを幼児の生活にとり入れる場合、あそびそのものとしてまたはあそびやその他の手段としての二つのやり方が考えられる。手段としてとり入れる場合には、(おとなの生活にも用い

るが)あそびや仕事の順序を決定することに用いることがよく行なわれる。幼児の生活において、たとえば鬼ごっここの鬼やその他あそびや仕事の役割をきめたり、また遊具のとり合いなどで順序をきめるなど、教師の好き嫌いや偏見をさけるために効果があり、子どもも合点しやすい。

教師は公平にやっているつもりでも子どもの目にはゆがんでとられることもある。指導の効果をあげる上に、公平であることは第一の条件である。ジャンケンによる決定は偶然的とは言え、自然的で感想的しこりが残らない。また組分けなどするとき、全部の子どもを二人ずつ向かい合わせて、同時にジャンケンをさせて、勝ったものは赤、負けたものは白というようにすると、子ども同士の好き嫌いをなくした組分けが出来る。

このようにあそびやその他の仕事、生活に活用するとおもしろい。そのためにはジャンケンの勝敗の理解が出来ることが条件であるから、三歳児では無理で年長組(五歳児)が適当であろう。四歳児も後期になるとだんだん活用できると思われる。

次にあそびそのものとして考えてみると、まず勝抜きあそびをあげることが出来る。五人ないし一〇人がグループとなって、一列にならび最初一人が前に出て列の前から順序に勝負をし負けたものに最後列にならびそれを繰返していくのである。その中に教

師がまじってやれば子どもは一層よろこび張切ってあそぶのである。教師との親しみもまし指導の効果もあるであろう。その他おはじきやカルタあそびなど、ジャンケンによって行なうのもおもしろい。この場合、おとなのような金品の授受は教育上好ましくないことは言うまでもない。

もちろん以上のおそび方もジャンケンの勝敗がわかることが条件であるから年長組が適当である。また、グー、チョキ、パーの相互の関係による勝敗でなく、一方がグー、チョキ、パーと唱えて、相手にそれに応じた同じ形を出させるあそびもおもしろい。出来るだけ早く言って相手をまどわし、まちがえれば負けということになり、次々に交代させるやり方である。このやり方は年中組（四歳児）にも可能であろう。年少組（三歳児）では、勝敗をとり入れることはできないが、時々、親や教師が一しよにいろいろの形を出して調子を合わせた動作をさせると結構楽しいものである。

その他、すでに述べた蟲拳とか藤八拳にみられるような、ジャンケンの各形に動物や虫の名などを関係させて、勝敗をききそうなどいろいろくふうするとおもしろい。また、私の関係する幼稚園の幼児の間には、手指によるジャンケンあそび以外に足拳（筆者が仮りにつけたもの）とも言うべきあそびが行なわれているのをみ

たのである。即ち、グーは両足をそろえ、チョキは両足を前後に開き、パーは両足を左右に開く三つの形である。二人が向かい合って、グー、チョキ、パーと言って、勝敗をききそうのである。手によるジャンケンと異って、足拳は全身運動であるところにまた興味もあり活動的である。

以上のようにジャンケンはいろ指指導者のくふうによって幼児のおそびの中にとり入れることが出来るであろう。あるいは室内において、あるいは運動場において、また年中何時でも行なうことができる。また単独のおそびとして、またその他のあそびや仕事等、と関連させて行なうことが出来る。すでに述べたように、あくまで純粹なおそびとして、おとなの世界の賭けごとであってはならない。

このようなあそびの中に、親も教師も出来れば、幼稚園や保育所では指導者との人間関係をよくし、そのことがその他の指導場面の効果を高め、その間に子どもの精神発達を理解することが出来るであろう。問題児の発見、指導にも大きい意義があると信ずる。以上筆者の研究調査を通してその概略を述べたが、幼稚園や保育所また施設の指導者の方々が試みていただかれて、種々御批判と御叱正を賜われれば幸甚である。